

ウェルカム

駅も回りもピッカピカに掃除する、ちよつと年配のボランティアグループ 駅から始まる町の顔づくり。

“駅をキレイにすること”。この分かりやすいシンプルなスローガンをなんと十五年も実践しているボランティアグループがある。

「草が伸びてくると、町の人に申し訳ない、やらんといかん」という気持ちになってくるんです」とは、川南駅を愛する会会長の福泉正敏さんの言葉。本当にスゴイ！なかなか簡単にはできないことではない。駅といえば町の顔である。その表情がいつも明るいのは、この川南駅を愛してくれる人たちによるところが大きい。

“町の木”として親しまれるサザンカが、きれいに整えられていつも訪れる人を出迎えてくれる。駅周辺にほとんど雑草は見当たらない。正月にはドデカイ門松が飾られ、待合室には案内版、ホームにはチリカゴ…みんなこのグループがやってきたことだ。

この会が発足したのは、新しい駅舎がいつも魅力的で、ますますたくさん



役員の大半は七十歳以上。六十歳が一番若く、上は八十二歳という高齢。家族の中には心配する声も出てくるという。しかし、自分たちがやらなきゃ、という思い

の人から愛されるように、その力になりたかったからだという。平成元年七月のことだ。しかし、ボランティアといっても経費ゼロというわけにはいかない。その費用はどこから捻出しているのだろうか。

実は、活動は会員の賛助金（年間五百円）によって成り立っていた。毎年、二百五十から三百人の会員たちが支えてくれる。ただし、最低二百人はいないと会の存続が危うい。この会員のうち、十人の役員たちがほとんど発足当時からメンバーだった。この十人が中心となって、運営されてきたといっている。

みんな時間通りにピシッと集まる。この団結心はたいしたもの。しかし、みんなそこそこの年をとってきた。



●川南駅を愛する会



が活動に駆り立てるよううだ。後継者を作ることが、これからの大きなテーマのひとつだ。現在、川南駅では一日に六百人を超す乗り降りがある。駅が利用客に好評なのは、玄関口がキレイなことと、もうひとつ理由があった。

平成十二年に町民から女性職員を二人採用し、女性ならではの気配りで、利用客に親しんでもらっているからだ。

いずれにしても、川南駅はハード、ソフト両面に渡ってウェルカム精神に溢れている。こんな風にならなくても輝いていられるように、ぜひとも若い人材にも期待したいところだ。

食と暮らし

女性だから浮かぶ知恵と行動を發揮して。

川南のこれからを模索するために、広く結集した女性陣のパワー

平成十三年にスタートした農山漁村女性会議は自分たちらしさを發揮した提案と実践を行う。県が示した「サンサンひむか農山漁村女性ビジョン」をもとに、農村や漁村に暮らす女性たちのこれからを、自分たち自身が勉強し、その成果を広めていくことが目的。様々な組織から参加している。それぞれの所属は「JA尾鈴川南女性部、漁協婦人部、酪農婦人部、川南町農村女性指導士、川南町漁村女性指導士、くらしの向上実践グループ、農林振興局、児湯農業改良普及センターなど」の、文字通り女性ばかりのグループである。

「ヨコのつながりを深めることにより、いろんな組織との情報交換がうまくいく。し

かも、私たちの声が行政に届きやすい」。会長の久家洋子さんは、農山漁村女性会議のメ

リットを話す。何とか時間をつくりながら、みんな午前中に活動しているそう。

会議では、それぞれの所属する団体からの報告や意見交換などが行われ、それらを基に、たとえば魚の勉強会、イチゴ狩りなど農業体験、酪農体験といった各自の持ち味を生かしたイベントが計画され、参加を呼び掛けていくことになる。副会長の河野博子さんは特に農業体験を広めていきたいという。

「今は食と農がかけ離れていますからね。もつと農業のこと、食べ物のことをいろんな人に知ってもらいたい。そのためには農業体験がイチバンとくに子供たちにはね」。そういえば、どれが旬野菜なのかすら、分かりにくくなっている現代だ。そんな食と農のことを知ってもらうひとつの機会として、



●川南町農山漁村女性会議

毎年行われる「農業・農村活性化フォーラム」に参加する。たとえば平成十四年十一月のフォーラムでは、「わが家の味大集合」の試食コーナーを設け、日本中から集まっている川南人ならではの、各家庭に残る故郷の味を披露する企画を実現した。訪れた人は口々に「この料理の素材は？」と「どんな風を作るの？」などと、関心を示した。

求められる彼女たちの舞台は、ますます広がりを見せていくに違いない。

文化

文芸は心の支え、暮らしの潤滑油として。

詩、短歌、俳句、川柳、随筆などの創作者集団

川南町に四十年近くも根を張る文芸誌がある。川南町文芸クラブが発行する「黒潮」。その創刊号（昭和三十九年創刊当時の名前は「文芸誌」）の表紙には通浜の素朴な漁村風景が描かれ、ページをめくるとたくさん力作が並ぶ。詩、短歌、俳句、川柳、随筆など生活の景色や匂いが浮かび上がってくるような…。日々の仕事の疲れを癒すかのように…。

「…畑に居ると空が、遠くの山が、又は足の下で土が、色々と話をしてくれるように感じられるのでございます。畜舎に行けば豚が牛が、家庭の雑事までが私に詩を感じさせてくれるのでございます。」

「…仲間も、田畑を耕し乍ら、教鞭に明け暮れ乍ら、又は事務を執っている合間に、一家団欒のゆうげの中に、ユーモアを求めて、またちよつぱり辛い諷刺を探して、五、七、五の語句を並べているのである。」

いる。暮らしの潤いとして、苦難を乗り越えるエネルギーとして、文芸活動の果たしてきた役割は極めて大きかったようだ。年二回、三百部の発行で、すでに百号を超える。執筆者は約百名、いうまでもなく大半が町民である。

「地域でこんなに大勢の人が参加し、互いに元気づけ、スクラムを組む文芸誌はちよつと見当たらないと思う。執筆も読者も大半が町民、川南の五十年を歩んできた人たちです。」

創刊七号から編集長を務め、川南町文化連盟の会長でもある高尾日出夫さんはこう話す。



●川南町文芸クラブ

かにし…」と、述べている。その精神はしっかりと根つき、いまやトントロントロントームを拠点にさまざまな文化活動が繰り広げられているのは周知の通りだ。